相模原市協議会

記録システムの活用学ぶ

"誰もが使える"状況を

一般社団法人相模原市高齢者福祉施設協議会（相模原市）は先月、市内の高齢者施設向けの研修会を開催。クラウド型ケア記録システムの導入事例をテーマに、施設での取り組みが紹介された。

講師を務めたのはブルーオーシャンシステム（静岡市）の開発部企画グループ沖本崇課長。同社の記録システムを導入した社会福祉法人上溝緑寿会（相模原市）と社会福祉法人大地の会特別養護老人ホーム塩田ホーム（同）の事例を紹介した。

上溝緑寿会は市内で高齢者施設を展開。2018年に記録システムを導入したという。

佐藤和夫理事長は「電子化された記録で、どこの事業所でもすぐに必要な情報に『つながる』ようにしたいと考えた」と語る。そこで、記録記入の際の「言葉のルール」を定めている。

「例えば『熟眠』という言葉のように、人によってその基準が異なるような曖昧な言葉は言い換えるようにした」

大地の会の特養塩田ホームは、導入前の現場の状況を分析。そこから、▽高齢スタッフが多くPC操作に不慣れ▽外国人スタッフでも使用できる必要性▽直感的に操作可能なタブレットの導入の必要性――といった観点で、現場で有用に使用できるシステムを選定していった。

また、記録の入力を業務の中で流れるように行えるように、安価なiPodを多数購入。多くのスタッフが記録端末を携行できるようにしたため、活用が進んだ。

市協議会はこのような研修会を継続して行っており、今後も研修会を通じ市内施設のレベルアップを図っていく方針だ。

高齢者住宅新聞：
2022年1月19日号より
（発行元：高齢者住宅新聞社）